

『らくらくノート』を使って 「学習のしつけ」を

■ 滋賀県守山市の先生

①はじめに

新年度がスタートした最初の学年会で、たくさんの教材見本の中から採用するテスト・ドリル・ノート類を選んでいくのが恒例になっています。今年度(平成23年度)は久しぶりの2年生ということで、「ノートの1マスの大きさは、どれくらいがよかったかなあ。」などと考えながら選んでいる時に目にとまったのが『らくらくノート』。ひと目見て「これだ!」と飛びつきました。

小学校、特に低学年のうちに「学習のしつけ」を身につけさせることは非常に大切です。「学習のしつけ」とは話し方・聞き方や書く時の姿勢、鉛筆の持ち方をはじめとして、机の上にもどのように教科書やノートを置くか、筆箱の中に何を揃えるかということまで含みます。これらのことをしっかり指導することが、将来にわたって学力を支える学習習慣を身につかせ、学習意欲を育てることにつながります。

その「学習のしつけ」の中で「ノートをていねいに、誰が見ても見やすいように書く」ということは大きな比重を占めています。ていねいに見やすく書くことで、一つひとつの問題に集中して取り組みます。また、自分で書いた「0」と「6」を見間違えるというようなことも少なくなります。『らくらくノート』はこのノート指導にぴったりなのです。以下に使い方を具体的に述べていきます。

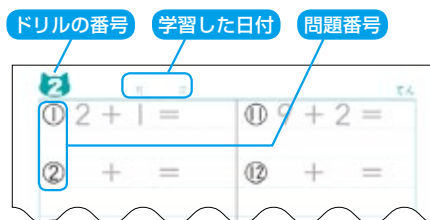
②『らくらくノート』を使っての指導の実際

①見やすいノートが無理なく作れる

ノート指導をする際には、その日の日付、ドリルの番号、問題の番号を書くということから指導します。当たり前のことのようにですが、低学年ではきちんと指導しないと、いきなり解答を書き始めたり、どこの問題をやっているのかわからなくなってしまったりすることがあるのです。また、算数の練習問題では、ノートを横に使っていくのか、縦に使っていくのかということも考えなければなりません。

2年生の場合、黒板に見本を示しながら事細かに注意できる授業中はまだしも、宿題となるとなかなか教師が示したようにはできず、行き当たりばつりのぐちゃぐちゃになってしまうことも少なくありません。その点、『らくらくノート』にはこれらのことがすべて書き込めるようにあらかじめ薄く印刷してありますから、家庭学習でドリルをする時に、ノートに書いてあるにも関わらず書き込み式のドリルをしているように整然と仕上がるのです。

▼『らくらくノート』の誌面

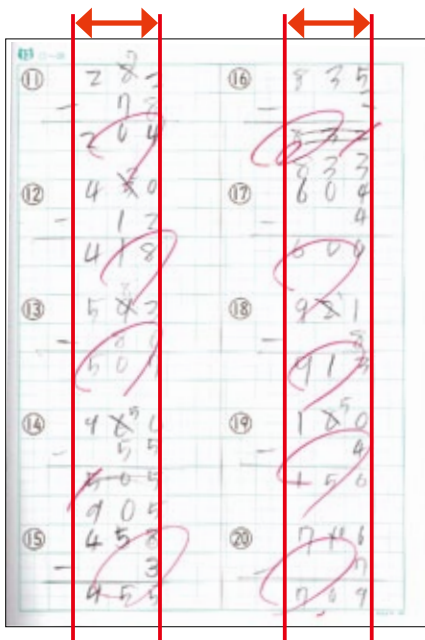


②問題と問題の間に必ず空白部分ができる

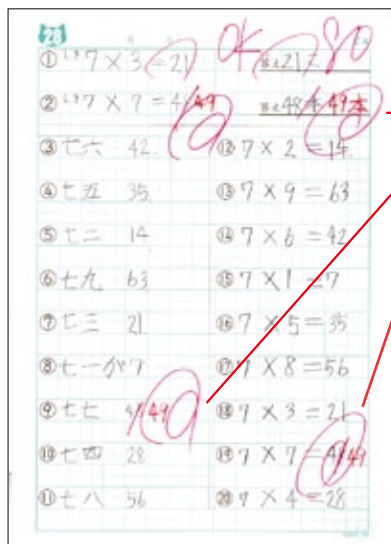
2年生の算数で初めて筆算を学習します。筆算をノートに書く時に、問題と問題の間(上下左右)に空白を作らずに詰めて書いていくと、筆算の答えと次の問題がつながったり、答えどうしがつながったりしてしまいます。

ノートのマス目の数と問題の桁数を考えて、体裁よく問題番号を打っていくのは、2年生にとっては大変難しいことです。しかし、『らくらくノート』では、あらかじめ空白部分が作れるように番号が打ってあります。また、①には問題が、②には「+」、「-」の記号と筆算の線が薄く印刷されていますから、それをなぞることにより、③以降もどのように問題を書いていけばよいか一目瞭然で、どの子もきれいに位を揃えて筆算ができます。位を揃えることは、筆算の必須条件です。きれいに揃えて書くことが当たり前、揃っていないと何だか気持ち悪いという意識を植えつけることが、まさしく「学習のしつけ」なのです。

▼筆算の必須条件である「位を揃えて書く」習慣が自然に身につく。



この空白は見やすいということ以外に、間違った時に計算し直した答えを書くことにも使えます。私は「間違いは宝物」ということを徹底し、間違った答えは絶対に消させません。必ず、計算し直した答えを新たに書かせるようにしています。こうすることで、自分のつまずきが明らかになり、同じミスをくり返すのを防ぐのに有効です。

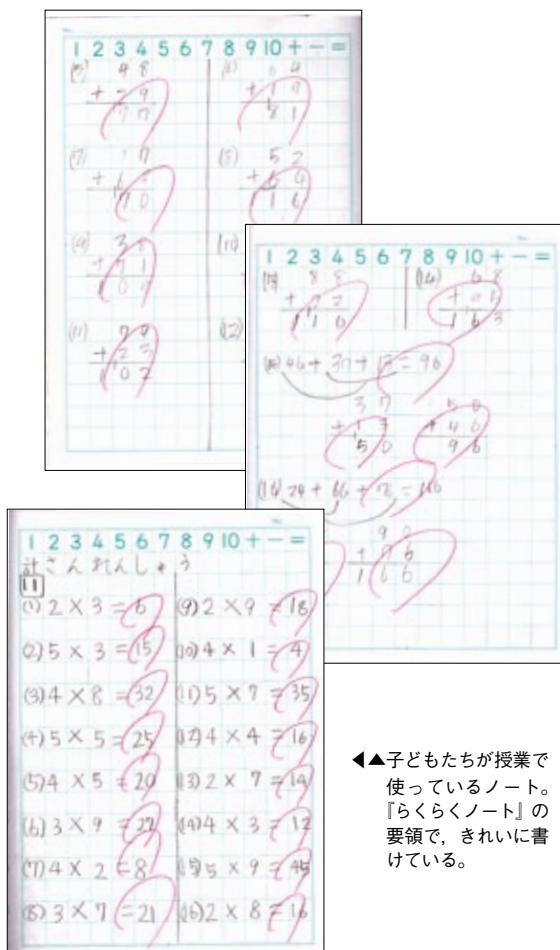


間違った答えと計算し直した答え

③『らくらくノート』を授業ノートに生かす

『らくらくノート』で練習したことは授業で使うノートにも生かします。ドリルは問題が縦に並び、教科書は横に並んでいますが、『らくらくノート』のように、上も下も右も左も1行空くように書いていくんだよ。」と言うと、子どもたちは簡単にイメージできます。

『らくらくノート』に頼り過ぎると自分でノートを整理する力がつかないという考えもあるかと思いますが、『らくらくノート』にくり返し正しく書かせることで、先ほども述べたようにきれいに書くことが当たり前という感覚が身につく、授業用のノートにもその感覚を生かせると思います。



◀子どもたちが授業で使っているノート。「らくらくノート」の要領で、きれいに書いている。

④教師の仕事の効率化

今年度は、私が『らくらくノート』の答えの点検をすべてしています。人数が18人と少ないこともありますが、『らくらくノート』だと、大変見やすいため、点検が短時間で済みます。朝少し早く教室に行き、登校してきた子どものノートを順に点検すれば、朝の会までに全員分見られます。そして、間違っているところを朝自習の時間や、休み時間に直させることができます。こうすることで、一人ひとりのつまずきをきちんと見極めて支援できます。また、翌日も続けてドリルの宿題を出すことができ、家庭学習の習慣化も図れます。

一人ひとりの宿題の提出状況も、ノートを見

ることでひと目でわかります。『らくらくノート』はドリル1ページに対して1ページか見開き2ページになっています。ノートを見れば何番が抜けているか、中途半端に終わっていないか、間違い直しができているかなど、子ども自身にもすぐにわかります。出された課題はきちんと仕上げるということも「学習のしつけ」の大切な要素です。ノートの提出状況を名簿でチェックして、未提出の子に「○番ができていないからやりなさい。」と言うのは、毎日のこととなるとかなりの労力がいらいます。しかし『らくらくノート』なら、書き込み式のドリルと同じく「○番まで仕上げましょう。できていない所や抜けている所があればやりましょう。」と言えばいいのですから、教師にとってストレス軽減になります。その分、つまずいている子どもの支援に時間をかけることができます。

⑤『けいさんの力だめし』の活用

学習したことの定着を図るために、朝のスキルタイムや授業で、『けいさんの力だめし』も活用しています。自作のプリントも使いますが、『けいさんの力だめし』は、ドリルに準拠しているため、單元ごとに系統立てて実施していくことができ、また安価なことも採用の大きな理由です。

裏面に印刷されているマス目も大変便利です。間違った問題をもう一度やらせるのですが、できるだけ「間違った理由」も書かせることにしています。

例えば(2桁+2桁)の筆算の場合、単純に(一位数+一位数)の計算を間違ったのか、くり上がりを忘れていたのか、問題を写し間違えたのか、誤答の理由は様々です。ただ、正答に書き直すだけでなく、自分の間違いを確認し、

原因を考えることに間違いを直す大きな意義があります。子どもたちは、丸さえもらえればい

◀おもて

▼うら



いと思いがちです。しかし、「間違いは宝物だから大切にしよう。」と言うと、子どもなりに一生懸命間違った理由を考えて書こうとします。このことは思考力や表現力を鍛えることにもつながります。

3 終わりに

夏休みの宿題として、新しく『らくらくノート』を1冊渡し、答え合わせは保護者の方にご協力いただきました。子どもたちからは宿題が多いと不満が出るかと思っていたのですが、すんなりと受け入れ、また、全員が1冊しっかりと仕上げてきました。1学期終了時に、くり下がりがあやふやだったり、時間がかかっていたりした子どももずいぶん速く正確にできるようになっていました。

『らくらくノート』でしっかりとノートの使い方を身につけさせ、自主的な学習態度と望ましい学習習慣を育て、ひいては学力を向上させることにつなげていきたいです。